

## 手記の向こう側へ : 三島由紀夫『金閣寺』再論

稲田, 大貴  
北九州市立文学館 : 学芸員

<https://doi.org/10.15017/1495360>

---

出版情報 : 九大日文. 23, pp.66-78, 2014-03-31. 九州大学日本語文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 手記の向こう側へ

——三島由紀夫『金閣寺』再論——

稲田 大貴

## 一、問題の所在

『金閣寺』（新潮社、昭和三十一年十月）は昭和二十五年七月二日に発生した金閣寺放火事件に取材し、題材を採った、一人称告白体によって綴られた小説である。前稿（『金閣寺』論——不能者のエクリチュール——（『九大日文』平成十九年十月））では金閣放火をめぐって、音声言語と文字言語の対立構造と手記という体裁を問題視し、『金閣寺』というテキストを、溝口による金閣の補完的な自慰行為であると結論付けた。しかし、これは溝口の内面的な問題であり、手記が外部に開かれたものであるという視点を欠いたものであったことは否めない。本稿でも一人称告白体という形式に着目することになるが、溝口の手記がいかにして外部に開かれてゆくかという問いについて考えてみたい。

まずは作者である三島との関係から、作品の位置づけを確認しておきたい。『金閣寺』をめぐって行われた三島と小林秀雄との対談では、次のようなやり取りがなされている。

**三島** 今に発禁になるでしょう。（笑）あれはね、現実

は詰んない動機らしいんですよ。見物人が来る、若いやつがきれいな恰好してね、アベックで見物に来たりする。それがシャクにさわる、自分は冷飯くわされて、みじめな恰好してるしね、自分の青春は台なしになってしまふ。そういうことらしいんです。住職が因業だ、なんていうこともあるらしいけど、大した動機はなかったらしいですね。

**小林** そりゃそうだろうね。三島君のは動機小説だからね、だからあれはむつかしかったでしょう。ラスコルニコフには、殆ど、動機らしい動機は書かれていない。やつちやつてからの小説だからね。君のは、やるまでの小説だ。

**三島** 本来は動機なんてないでしょうね、ああいうことをやるやつ。

**小林** ないでしょうね。……で、まあ、僕が読んで感じたことは、あれは小説っていうむしろ抒情詩だな。つまり、小説にしようと思うと、焼いてからのことを書かなかや小説にならない。つまり現実の対人関係っていうものが出て来ない。対社会関係も出て来ないからね。君のラスコルニコフは、動機という主観の中に立てこもっているのだから、抒情的には非常に美しい所が出てくるわけだ。（後略）（『美のかたち——『金閣寺』をめぐって』（『文芸』昭和三十一年一月）『全集』39）

三島は現実の金閣放火事件の動機をさまざま挙げ、「詰んない動機らしい」、「大した動機はなかったらしい」と述べている。

三島はここで「らしい」という推測を含めながらも、「真実」としての動機は、自身が『金閣寺』で描いたようなものではないと考えていたようだ。「金閣寺」創作ノート（『全集6』）には、「◎主題」として「美への嫉妬」と記されている。「金閣寺」ではそれを敷衍し、「美と人生」の対立構造から放火事件を描き出している。しかしこの「美への嫉妬」は当然、三島の創作ではない。水上勉は『金閣炎上』（新潮社 昭和五十四年七月）において、若木松一による第三回供述調書の写し書きを抜き書きしている。そこには「一、私が金閣を焼いた事は、私の行いを見ると見にくい（醜い？ 水上注）ので美に対する嫉妬の考へから焼いたのですが、真の気持は表現しにくいのであります。」と記されている。この第三回供述調書を三島も事件を調査する過程において何らかの形で参照していることは「金閣寺」創作ノート」の「◎供述調書」の項を見れば明らかである。つまり、金閣放火という事件そのものに興味を引かれ、調査を行った三島は、林が事件の動機として供述した「美への嫉妬」という動機に反応し、それを『金閣寺』の主題に据えたことは疑いない。しかし三島はそれを、「真実」の動機として信じていない。そして三島は、金閣放火に「本来は動機なんてない」とその直後に述べる。

ではなぜ三島は「動機小説」として『金閣寺』を書いたのか。先の引用での「動機小説」とは小林の解釈だが、三島自身も同様のことを述べている。

（前略）もし全く無動機の行為があれば、欲望の純粹性の把握も容易になるだろうが、現代生活はもろもろの動機に充ち、その結果、欲望といふものの実在が不明になった。

動機なき犯罪とは、現代では空想の所産にすぎず、無動機に見える犯罪ほど、非合理的なノンセンスな動機に動かされてゐるのである。私が「金閣寺」で書いたことは、犯罪の動機の究明であつたが、「美」といふ浅薄な愚かしい觀念だけでも、国宝に対する放火といふやうな犯罪の十分な動機になり得る。（後略）（『裸体と衣装―日記』新潮社 昭和四十一年十一月『全集30』）

小林との対談において三島は、金閣放火について「本来は動機なんてない」と語りながら、この文章においては「動機なき犯罪とは、現代では空想の所産にすぎ」ず、『金閣寺』は「犯罪の動機の究明」を書いたとしている。このズレはどのように考へるべきなのだろうか。「動機の究明」を書いたとし、実際の事件に取材したものの、「真実」の動機を明らかにする意図は三島にはなかった。では、「本来は動機なんてない」が、「美への嫉妬」という偽りの動機を、「究明」という身振りをとることでなされた動機の創作だろうか。これに答えを出すのは極めて困難である。すでに起こった『金閣寺』という作品創出の「動機」は、すでに事を終えた三島の文章から「復元」しても決して到達できない。しかし「究明」か、創作かはさておき、三島が『金閣寺』において、金閣放火の動機を描こうとしたことは

事実であろう。小林もそのように、『金閣寺』を「やるまで」を描いた「動機小説」として読んでいる。このことは、疑う余地のない自明のこと、なのだろうか。本稿ではその見方にあえて疑問を呈し、揺さぶりをかけてみたい。

## 二、一人称告白体という形式をめぐって

『金閣寺』の一人称告白体という形式に、最も早い時期に着目したのは田中美代子である。田中美代子は次のように述べる。

さらにこの小説の構造の要は末尾の結語「一ト仕事を終へて一服してゐる人がよくさう思ふやうに、生きようと私は思つた」である。ところが、すでに「行為者」としての使命を終つた「私」が、これから「生きよう」とは一体何のためにか？　いうまでもなくそれは行為の意味を語るためにほかならず、彼は「語り手」として再生し、ふたたび冒頭にもどつて、この物語が語られはじめの筈なのである。つまり一回限りの「行為」は「語る」ことによつて、幾度でも繰り返し、甦ることができるといふ循環的な構造をもつにいたるのである。（『美の変質―「金閣寺」論序説』（『新潮』昭和五十五年十二月））

田中美代子は『金閣寺』の結部「生きようと思つた。」といふ一文と、既に金閣放火を終えた溝口が書き手であることから本

作が「循環的な構造」を持つてゐることを指摘している<sup>②</sup>。しかし「生きよう」と思うことと書くことは、田中美代子が述べるように「行為の意味を語るため」という理由によつて繋げられるのだろうか。有元伸子は田中美代子の述べる語りの循環性について、それ自体が「重要」であるか「やや疑問がある」として、一人称告白体の形式を問ひなおしているが、「これから「生きよう」とするのは、当然、作品の冒頭に戻つて、この物語を語り始めることだといつてよ」としている（有元伸子『金閣寺』の一人称告白体（近代文学試論 平成元年十二月）。有元論では「生きよう」とすること⇨書くことを通じて他者とコミュニケーションすること、として結びつけられており、田中美代子論で示される「行為の意味を語る」こと⇨「生きよう」とすることとは微妙な差異を孕んでいる。有元論では「他者との理解」がこの一人称告白体という形式の意味として見出されているわけだが、これは自らの言葉で他者に「行為の意味を語る」ことと同義であり、つまり書き手としての「私」は「行為の意味」（動機）を、他者への志向性をもつて書いてゐる。この有元の見解は、多少の差異はあるものの多くの論者の共通見解となつてゐる<sup>③</sup>。

しかし『金閣寺』を、溝口が書く行為を手に入れるまでの物語として読む（すなわち「動機小説」として読む）論、そして、一人称告白体（手記）であることに基軸を置く論の双方に対して、喜谷暢史は舌鋒鋭い批判を投げかけている。

ところで、この杉本・三好が作品の中で問題にしている〈行為〉論は、「語られている」かつての溝口が金閣を焼くまでの〈行為〉そのものであって「語っている」溝口自身が「書くという行為」を手に入れるまでのドラマではなかった。同様に、『金閣寺』を「抒情詩」だと切つて捨てる小林秀雄にしろ、問題にしているのは金閣を焼くという以前の〈行為〉だけであり、その動機小説という枠組みを越えるものではない。この溝口の〈行為〉の世界全体を解くには、彼がその後獲得した「書くという行為」に腑分けされなければならないだろう。

ナラトロジー的方法論の導入は、本来なら「語られている」対象としての〈行為〉と、「語っている」現在の溝口の「書くという行為」の峻別を容易にしたはずである。にも関わらず、その両者が峻別し切れていないのが、先の章で問題にした先行研究であった。さらに、「語られている」溝口と「語っている」溝口が重層化され、その〈語り〉は特に終局に向けて、焼くという〈行為〉と「書くという行為」を非常に近接した位置に配置する。あの実況中継的要素が増大する〈語り〉に見られるように、「語られている」時間と「語っている」時間軸の境界も曖昧になる。焼くという〈行為〉によつて世界が変わったかのように見えるのはそのためであり、問題は如何に溝口が「書くという行為」を手に入れていったのかという彼の現在の〈行為〉、性なのである。金閣を焼くまでの〈行為〉を問題にするのは、そ

の表層のストーリーを追っているに過ぎない。(三島由紀夫『金閣寺』論―手記の中の「認識」と「行為」(『国文学論考』平成十二年三月)

喜谷は「動機小説」として読む論を、「表層のストーリーを追っているに過ぎない」と批判、また手記であることを論じたものを、二つの主体が峻別されていないと批判している。この批判は、先行論の批判に留まらず、『金閣寺』が「語られている」溝口と「語っている」溝口が重層化され「ていること、すなわち、二つの主体が峻別され難い語りによつて構成されていること」を提示している。そしてこの構造こそが「誤読」を導いてきた。三好行雄は次のように述べている。

手法上の重要な特色のひとつだが、この小説では、語り手の位置は回想される過去の時点にのみ固定される。事件がすでに完了した時点での回想であるにもかかわらず、想起にともなう判断や印象の訂正がほとんどあらわれない。

(『背徳の倫理―『金閣寺』三島由紀夫』(『作品論の試み』至文堂 昭和四十二年六月)

この三好の再構成に関する見解について、東郷克美は「あとから順を追つて考へると、それは士官の子を孕んだ女と、出陣する士官との、別れの儀式であつたかと思はれる」(第二章、「――後になつて思ふと、このときの母との対面は、私の心に少な

らぬ影響を及ぼしてゐる」(第三章)、「それらは多少とも影響を及ぼし、のちに私がした行為の素因となつたことは認めるが、行為そのものは私の独創であつたと信じたい」(第六章)、「あとから思ふと、突然に見えるこの出奔にも永い熟慮とためらひの時期があつた」(第七章)、「今にして思ふのだが、私の旅の衝動には海の暗示があり……」(第七章といつた箇所を挙げ、「正確でない」と反論している(「金閣寺」―監獄の中のエクリチュール―

(「國文學 解釈と教材の研究」平成五年五月)。東郷は『金閣寺』が手記であることに重きを置き、三好の読み落としを指摘しているわけだが、三好は「語り手の位置は回想される過去の時点にのみ固定され」ていることを十分に知悉していながらも、東郷が指摘している箇所を読み落とし、再構成が「ほとんどあらわれない」と語る。このような「誤読」を引き起こしたのは、先に述べた書き手である溝口と、書かれる溝口という二つの主体が峻別され難い構造を『金閣寺』が有していることが一因と考えられる。そしてこの構造を最も反映した読みを示しているのが、許昊『「金閣寺」論―手記とモノローグの間―』(「稿本近代文学」平成九年十二月)である。許は三好、東郷両氏の論を踏まえてつ、「第一章から第九章まで、手記として書かれてきた『金閣寺』が最後の第十章に至って、いきなりモノローグに変わった」と論じ、また『金閣寺』の最後の部分を引用し、「回想なのか現在の出来事なのかも分からない」と述べる。許はこの論考において、二つの主体のみならず、その時間軸までも混同している。

しかしこの「誤読」は、あくまでカギカッコ付きの「誤読」であり、誤読ではないことを急いで言い添えなければならぬ。有元伸子・大西永昭・中元さおり「草稿研究―『金閣寺』を事例に」(「國文學 解釈と鑑賞」平成二十三年四月)において、「《作業仮説》としての《作者》」を見出す試みとして『金閣寺』草稿の分析が行われている。

(前略) 放火後の時点から回想する形態をとりながら、放火後の「今」の状況・語っている《現在》はできるかぎり消去していく―これが、草稿から伺える《作者》の補筆の方向性なのだ。

そこには、《書いている現在》をなるべく無時間的なものに設定しようとする意志が感じられる。『金閣寺』という小説には、確かに語り手によって語られる物語世界の時間軸と、その語り手自身が身を置く場の時間軸という二つの時間が内在し、その二つの時間軸の接続点を想像することで、これまで小説の循環構造などが指摘されてきた。しかし、草稿をみる限りでは、語りの場の時間軸はなるべく具体化されないように修正されており、二つの時間軸を読者が接続しようとしても完全には繋げられないように作られている。(有元伸子・大西永昭・中元さおり「草稿研究―『金閣寺』を事例に」(同前))

この論考で示された《作者》を信憑したとき、三好、許の論考

は《作者》の意思に導かれたものであり、その意味において誤読とは言えない。しかしここで有元らが示した「《作業仮説》としての《作者》」と本文との間に違和が生じていることも事実である。先に引用した、東郷が指摘している箇所がその発生源である。書き手を無時間的な存在にしようとした《作者》と「犯罪の動機の究明」を意図した「三島由紀夫」とは小林の、「動機小説」、「やるまでの小説」という『金閣寺』評によって接続される。「やるまで」を描いた「動機小説」たるためには、「やっちゃってから」は出来得る限り透明な位置になければならない。《作者》、「三島由紀夫」は小林に「誤読」をさせる程に、それに成功した。しかし、「やっちゃってからの小説」として読む可能性は、東郷が指摘した箇所が残されている以上、消えることはない。そしてこの地点からの読みは、『金閣寺』を「動機小説」として読むことを更新しうるものと考えられる。

### 三、手記であるということ

手記であるということを論証した東郷は、その意味に踏み込んでいいる。しかしそれは、全てが終わった終末の側から書かれているという、書き手の立ち位置と溝口の吃音の問題について論じるに留まっている。この、なぜ『金閣寺』は手記でなければならなかったか、ひいては手記であるということでのどのような読みが可能となるのか、という問いに対して、有元は「他者に対する、読者に対する主体的な関わり方の一手段として、彼

は、「書くこと」を積極的に「選ん」たと述べ（有元伸子『金閣寺』の一人称告白体（同前）、佐藤秀明はその宛先を、溝口に内在化した柏木と解釈している（佐藤秀明「犯罪実行者の手記―『金閣寺』論2」（三島由紀夫の文学）（試論社平成二十一年五月））。これらの論考は、手記の受語主体について考察しているが、本稿では手記であることがいかなる読みを可能にするか、また手記を書くことが発語主体たる書き手の溝口にどのような意味を持ちうるかという視点から論考を進めていきたい。<sup>6)</sup>

結末部から始める。「一ト仕事を終へて一服してゐる人がよくさう思ふやうに、生きようと私は思った。」生きようと思つた、語られる対象としての溝口は、冒頭へと戻り、語り手として語り始める。先に引用した田中美代子論ではここにテクストの循環構造を見出している。しかし「生きようと」「思つた」「私」は何者なのだろうか。行為を遂げた直後の書かれる溝口か、それを回想する書き手の溝口か。これを峻別することはおそらく不可能である。読者に与えられているのは、書き手たる溝口の記述のみであり、放火直後の溝口が本当にそのように思つたのか、また思わなかったのか、を判断することができない。この記述を信憑し、行為を終えた溝口がそのように思つたと判断される時のみ、田中美代子という循環構造は保証される。しかし書き手の溝口が無時間的な時空に置かれることで、物語内の溝口がそう思ったように書かれていることから、この記述を事件当時の溝口が思つたと信憑するように仕向けられていることは事実であろう。つまり「生きようと私は思つた」という記述

と、手記を書くという所作とは何らかの有機的結びつきを持っていることが推測されるのである。そして、この結びつきがどのようなものかという問いが立ち上がってきたとき、それまで無時間的で曖昧な位相にあった書き手が、書かれる溝口と連続性をもって浮かび上がってくるのである。

では、手記であるということはいかなる読みを可能にするだろうか。有元、佐藤の論考においては小林が「抒情詩」と読んだような自閉的な読みに対して、『金閣寺』が他者への回路を持つていることが示された。確かに両氏が指摘する、読者への呼びかけの文章からは他者への回路が見出され、その解釈は妥当である。しかしこの手記は他者との関係性のみにおいて捉えられるものだろうか。手記という形式が、書かれる自己と書く自己という二つの位相を内包することは、これまでも述べてきた通りである。言うまでもなくここには、決定的な時間的ズレがあり、書き手たる溝口は物語内時間より未来に位置し、物語に対してメタ的な位相を持つ。このとき、書かれる自己と書く自己とは紛れもなく同一の存在でありながらも、その主体は二つに引き裂かれることになる。このとき、書く自己にとつて書かれる自己は、「他者」的存在となるのである。かつて行為に至った自己を言語化するという所作は、「他者」的存在であるかつての自己を理解しようとする、自己同一性の回復の試みではないか。このように見たとき、二つの主体は連続性と非連続性のゆらぎの中にある。この仮説は先の有元、佐藤の論と矛盾しない。他者と関わり合う、そのためには自己が何者であるか

を示さなければならぬはずである。

しかし溝口にとつて手記を書くということは、それほど「素直」な出来事なのだろうか。書き手である溝口は次のように書いている。

吃りが、最初の音を発するために焦りにあせつてゐるあひだ、彼は内界の濃密な翳から身を引き離さうとじたばたしてゐる小鳥にも似てゐる。やつと身を引き離れたときには、もう遅い。(中略)しかし待つてゐてくれる現実はもう新鮮な現実ではない。私を手間をかけてやつと外界に達してみても、いつもそこには、瞬間に変色し、ずれてしまつた、……さうしてそれだけが私にふさはしく思はれる、鮮度の落ちた現実、半ば腐臭を放つ現実が、横たはつてゐるばかりであつた。(『金閣寺』全集6『一頁』)

自身の吃音について書かれたこの箇所は、現実と言語の関係を示唆している。言葉をもつて現実を掬いとうろうとしたとき、吃音がそれを阻む。ようやく紡いだ言葉は、もはや現実に遅延している。吃音である溝口にとつての言語とは、内界と外界を繋ぐはずのものでありながら、それを手にできないもどかしさと共にあるものである。書き手である溝口が未だ吃音であるかは決定不可能であるが、少なくともそれを経験していることは事実である。彼は、自身の言語、音声言語では「新鮮な現実」を掴みとることができないという認識を持つている。このように



溝口の認識を捉えたとき、『金閣寺』が手記であるということはいかなる意味を持つか。この問いは前稿においても問題にしたが、再度確認しておきたい。手記は言うまでもなく文字言語に拠るものである。ここに『金閣寺』における音声言語／文字言語という対立構造が見出されるわけだが、文字言語でも「新鮮な現実」は語りえない。自身の吃音が音声言語によって「新鮮な現実」を掴みとることを妨げていると考える溝口にとって、文字言語によって表された現実も、「鮮度の落ちた現実、半ば腐臭を放つ現実」、すなわち現実の代補にすぎないことは十分に知悉されていたはずである。その上で、なぜ溝口は「新鮮な現実」、すなわち痕跡として既に世界に「書き込まれた」、自身の金閣放火という行為を、手記という「新鮮な現実」に遅延する形式で書いたのか。

溝口は次のように書いていた。

……が、私には、老役員たちのかうした理解の仕方、私が理解されることに対する、云はん方ない嫌悪があつた。「これらの言葉」で私が理解されるのは耐へがたい。「私の言葉」とはそれとは別なのである。(『金閣寺』一九七頁)

溝口は「これらの言葉」で理解されることを拒否し、「私の言葉」が存在することを言明する。そして「私の言葉」によって、自身を描き出したのがこの手記である。書き手たる溝口にとつて、金閣放火を実行した自身を描くという行為は、真なる「自

己」すなわち「本当の動機」を描き出すことではない。「これらの言葉」によって規定された（あるいはされかねない）、また行為によって「自己」から断絶された「自己」を自身に取り戻す行為ではなかったか。しかしそれは、「どのように」なのか。

#### 四、認識と行為、その向こう側

『金閣寺』において、金閣放火は「美と人生」の問題として提出されるが、その間には「認識と行為」の問題が横たわっている。これは溝口と柏木の間で交わされる話の主題であり、作中で提示される「南泉斬猫」の公案もそれを象徴するものである。この問題は金閣放火に関してのみならず、手記を書くことをめぐっても適用される問題である。これについては田中実の論に触れておかなければならない。

この小説は〈認識と行為〉の永遠の循環をステイックに示す、あるいはアフォーリズムのように凝縮、完結しているのではなく、その相関の形を〈語り手〉と〈語り手を超えるもの〉の重層によって追い詰めたものである。一方で書く行為者（語り手）は〈認識〉の内をその極限で円環しつつ、なお〈行為〉へと脱皮できないまま、その境界を内から顕わにしていき、同時に〈語り手を超えるもの〉によって、〈語り手〉の語る主体の限界が示され、その領域に境界線が引かれていく。それはそれまで外界と

の通路を断たれていた溝口が金閣を焼くことで「怨敵」を打倒し、その経緯を告白するという形で「他者」に向けての表現を獲得、語る主体を手に入れることであつた。しかしそのときの「他者」とは「わたしのなかの他者」ではないことに逢着していく問題である。『金閣寺』はここで一直線に、近代小説が伝統的に担つた難問を背負うことになる。「語り手」と「語り手を超えるもの」を統括する「作者」は手記を書く者の限界を露わにしていくなのである。「作品の意思」もそこにあるのではないか。（『金閣寺』の「語り手をこえるもの」―作家へ―（芸術至上主義文芸』平成十年十一月）

田中実を書くことをめぐる「認識と行為」の臨界点を『金閣寺』に読み、「手記を書く者」の限界を指摘する。田中実論に異論を差し挟む余地はない。しかし、書き手たる溝口にとつての手記のもつ意味はまた別の問題である。それについて論じる前に、金閣放火をめぐる「認識と行為」の問題について確認しておきたい。

柏木は由良の海で金閣放火を決意した溝口の前に現れ、鶴川の死の真相を告げた後、次のように語る。

（前略）「俺は君に知らせたかつたんだ。この世界を変貌させるものは認識だと。いいかね、他のものは何一つ世界を変へないのだ。認識だけが世界を不変のまま、そのままの状態で、変貌させるんだ。認識の目から見れば、世界は永

久に不変であり、さうして永久に変貌するんだ。（後略）（『金閣寺』二二七頁）

柏木の示す論理に対して、溝口は「世界を変貌させるのは行為なんだ。それだけしかない」と、「告白とすれすれ」の言葉でもつて応酬する。そうして金閣放火に臨む溝口はその直前、「激甚の疲労」に襲われ、次のように書かれる。

『（前略）柏木の言つたことはおそらく本当だ。世界を変へるのは行為ではなくて認識だと彼は言つた。そしてぎりぎりまで行為を模倣しようとする認識もあるのだ。私の認識はこの種のものだつた。そして行為を本当に無効化するのもこの種の認識なのだ。してみると私の永い周到な準備は、ひとへに行為をしなくてもよいといふ最後の認識のためではなかつたか。

見るがいい。今や行為は私にとつては剰余物にすぎぬ。

（後略）（『金閣寺』二六九頁）

「行為そのものを完全に夢見た」溝口にとつて、金閣放火はもはや「徒爾」と見做される。しかし溝口は「臨在録示衆の章の名高い一節」に弾かれ、「徒爾であるから、私はやるべきであつた」と、放火を実行し「行為者」となる。金閣放火は既に溝口に認識されたものであり、この「行為」は認識の模倣であるとも言える。しかし「認識と行為」の間を飛躍した溝口は、そ

れがたとえ認識の模倣であつたとしても、「行為者」である。「ここまでが私であつて、それから先は私ではない」（傍点原文）と書かれているのは、そのことを意味する。

では「行為」を終えた溝口の心情として、「一ト仕事を終へて一服してゐる人がよくさう思ふやうに、生きようと私は思つた。」と書かれるのは、どのように理解すべきなのか。この「生きよう」という意志と、手記を書くことは直線的に接続されるのだろうか。「怨敵」である金閨を燃やしたことで外界への扉が開かれた（と感じた）溝口が「生きよう」という意志を持つことは理解できる。しかしなぜその「行為」を書く必要があつたのか。外界において「生きる」とは、「かれらの言葉」で理解されることと、「私の言葉」で自らを語ることのせめぎ合いの中でなされるものである。しかし手記とは、いかに外界を内部に措定したとて、自己の内なる「他者」に過ぎない。そして「行為」を終え、手記を書く溝口自身にとつても、「行為者」であつた自己はもはや「他者」である。つまり手記を書くという行為は、その非連続性を連続性へと転換し、「私の言葉」で自らを語るという意味において自閉的なものである。このように考えれば、「生きよう」という言葉は放火を終えた溝口の意思に留まらず、この最後の一文を書きつけ、書き終えた溝口の意思もまた反映されていると理解する方がよいのではないか。書き手たる溝口の書くという行為は、金閨放火を為したことで「他者」化した自己と、現在の自己との連続性を取り戻すための行為であつた。これは「他者」化した「行為者」である自

己と、書き手である溝口との認識の闘争と言ひ換えることもできる。そして、溝口は書き始める。「他者」化した自己を捉えるという認識の闘争を、エクリチュール文字言語によつて現前化するのである。無論それは闘争の代補に過ぎず、欠落あるいは余剰を孕んだものであり、痕跡としての闘争そのものではあり得ない。すなわち溝口の手記を書くという行為は、「他者」化した自己に対する認識をぎりぎりまで模倣した行為なのである。

ここまで論じてきてようやく、なぜ溝口が手記という体裁を選択したかということに言及できる。なぜパボ音声言語による独白ではなく、エクリチュール文字言語による手記を溝口は選択したのか。痕跡の現前化、そのあり方は結局は根源の代補に過ぎず、パボ音声言語／エクリチュール文字言語という対立構造は脱構築される。しかしその上でなお『金閨寺』においては、この対立構造の問題は保留されると考えられる。それは物語中の溝口が吃音であることに起因する。この吃音は溝口にとつて内界と外界を隔てるものであり、その意味において溝口が女性と関係を持つこと＝人生と繋がることを阻害し、不能に至らしめる金閨と同様のものである。この吃音と不能は、溝口が人生と繋がりうとする際のみ発現する<sup>6)</sup>。では放火という行為は、溝口の内界と外界をつなげたのたろうか。『金閨寺』について小林は「動機という主観の中に立てこもっている」と述べたが、それに対して記述の分析を行った有元が「他者との理解」が手記に表れていることを明らかにし、その「他者」を佐藤が「私」に内在化した柏木」と論じたことは前述の通りである。両氏の論に異論はない。しかしその他

者とは、溝口に内在化した他者に過ぎないこともまた事実である。この他者は確かに、了解不可能の他者とのコミュニケーションの可能性を秘めたものではあるが、手記を書き始める溝口は明らかにそこに至っていない。つまり金閣放火という行為がそれ自体は、溝口の内界と外界との扉を開きはしなかった。金閣放火が導いたのは、了解不可能の「他者」と化した「自己」である。音声言語は原理的に受語主体の存在なしに成立しない。しかし書き始める直前の溝口には受語主体、すなわち了解不可能の他者は存在しない。故に彼は、手記を書くという行為を選択したのである。その最中、「他者」化した自身を語りつつ、自己の内部に措定した受語主体である「他者」に理解を求めているのである。

そして、手記を書き終えた溝口は、おぼろげと外界へそれを差し出すだろう。このとき初めて、「他者」化した自己と、内在する受語主体としての「他者」を超えて、了解不可能の他者への回路が開かれるのである。それは我々読者の言葉、すなわち「これらの言葉」で理解、解釈されることになるだろう。そして、ここにこそ『金閣寺』が「動機小説」として読まれてきた「制度」が潜んでいる。『金閣寺』の同時代の読者が、現実の金閣放火事件を作品の背後に見ていたであろうことは佐藤論で既に示されている。金閣放火という了解不可能の行為、その動機は暴力的な誘引力を持つ。それを了解したいという読者の他者への欲望、それこそがこの「動機」を読むという「制度」を支えてきたのである。無論それは、『金閣寺』というテクス

トの「リアリティ」が下支えしていると言える。

## 五、結論

『金閣寺』は金閣放火を「やるまで」を描いた「動機小説」か。この読みを佐藤は「非常に堅固な制度的な見方」として、これを「楽天的な傍観者の態度」と見做す。その矛先はこの制度を構築してきた評者に向けられたものであろう。しかし佐藤自身が引用している溝口の記述、「生れたときから、私はそれを志してゐたかのやうだつた。」という文章からは、書き手たる溝口自身が自らのふるまい、思考を金閣放火の「動機」へと接続させていく志向をもっていたことを否定できない。佐藤は「人生の明るい表面に対する無資格」という表現に焦点化し、「私」と世界との関係、「私」の内界をいかに外界へと開くか」という方向性があることを示し、論を進める。このような佐藤論は、本稿と同じ方向性を持つている。しかし佐藤は、先の問いに対し、溝口は「生きよう」と思い、手記を書いた」と論を締め括る（「対話する言葉の誕生―『金閣寺』論」）（『三島由紀夫の文学』（同前））。これは田中美代子が主張した循環構造を踏襲したものである。以上を踏まえ、佐藤論と本稿の差異を示すことで、結論としたい。

書き手たる溝口は、放火に至るまでの自らの思考、所作の全てを金閣放火に接続させ、「動機」を書いている。佐藤は「人生の明るい表面に対する無資格」という記述に見える微妙なゆ

らぎを捉えている。それは、「動機」という枠組に抑え込まれた微細なものである。それを見逃さなかつたのは佐藤の慧眼と言える。しかしなぜ、抑え込まれたのか。言い方を変えよう。

なぜ書き手たる溝口は「動機」を書かねばならなかつたのか。これは単純に外界とのコミュニケーションを図つたものではない。金閣放火という、「徒爾」である行為をなした溝口は、自己の内部に「他者」を抱え込むことになり、自己同一性のゆらぎを孕んだ。その回復に、書くという行為が必要だつたのである。そしてそれは、外界と内界とを繋ぐ行為でもあつた。つまり溝口は自己の内部に了解不可能な「他者」としてのもう一人の「自己」を抱え込み、それを「理解」しようとする行為、書くことをもつて、初めて内界と外界を繋ぐことが可能になつたのである。

この手記には確かに「やるまで」の「動機」が書き込まれている。その読みは、『作者』、『三島由紀夫』の意図通りである。しかしそれは、他者の側、用意された「読者の座」からの読みである。それはまた溝口にとつても意図通りのものである。そのように読まれ、「理解」されることは、溝口にとつて「生きる」ということなのだから。それはしかし、語られる溝口でも、書き始める溝口でもなく、「一ト仕事を終へて一服してゐる人がよくさう思ふやうに、生きよう」と私は思つた。」という一文を書きつけ、書き終えた溝口の意思である。このときの手記を差し出す所作こそが、自閉的な循環構造を打ち破り、外界への扉を開く。かくして「他者」なる自己を超え、他者への回路が

開かれるのである<sup>(8)</sup>。

#### 【注記】

1 『金閣寺』創作ノート』の『◎供述調書』と水上の『金閣炎上』で示される第三回供述調書の抜き書きは、引用した箇所その他、その記述が大きく重なっている。しかし『◎供述調書』では動機に関する記述はなされてない。

2 先行研究において「語り手」と「書き手」という語は、論者によって用法が異なる。物語論の領域においては「語り手」とするのが一般的であるが、本稿では『金閣寺』が明らかに手記の体裁であり、書かれたものであることから、特別な場合を除いて「書き手」を用いた。

3 手記が「他者」への志向、テクスト内に受語主体を設定していることを認めた論として、杉本和弘『私』の手記という方法―『金閣寺』の場合―（『名古屋近代文学研究』平成三年十二月）、佐藤秀明『犯罪実行者の手記―『金閣寺』論2』（同前）などが挙げられる。

4 手記を書くことが書き手の溝口にとつての問題として考察したものととして杉本和弘『私』の手記という方法―『金閣寺』の場合―（同前）、清沢遥香『金閣に代わるものとしての手記―父親殺しの物語として―』（『尾道大学日本文学論叢』平成十八年七月）などが挙げられる。

5 例えば舞鶴海軍機関学校の一生徒とのやり取りでは、「入りません。僕は坊主になるんです」という「明るい世界」を拒否する言葉は「すらすらと流れ、意志とかかはりなく、あつといふ間に出」ている。また十五番街でまり子との関係を持つ前には「私は何も夢見てはる、女によって人生に参与しようなどとは思つてはるないからだ。」と書かれ、不能に

陥ることなく性交を果たしている。

6 佐藤は「どうも『金閣寺』を手にした同時代の読者は、六年前に焼失した鹿苑寺金閣を思い出さずにはいらなかったようだ。」と述べ、白井吉見の同時代評を引きながら「読まれることで成立するテクストが、この場合は、読まれる以前に、物語を生み出してしまっているのである。」と論じている。(『犯罪実行者の手記―『金閣寺』論2』(同前))

7 佐藤は、溝口が中学生の時に短剣の鞘に傷をつけたことが「金閣を焼く動機になっっている」とする河上徹太郎の評を「誤りとして退けることはできない。」としながら、手記に動機の「論理的必然性」があり、それを整理することで「私」のメッセージを理解できると考える態度を「衆天的な傍観者の態度」と断じている(佐藤秀明「犯罪実行者の手記―『金閣寺』論2』(同前))

8 出原隆俊は「金閣寺の構成意識」(三島由紀夫研究⑦三島由紀夫・近代能楽集)平成二十一年二月の冒頭において「『金閣寺』」溝口の手記(第一章から最終第十章の章分けも溝口によるのだろうか)には「前にも述べたとほり」や「あとになつて思ふと」という記述が繰り返し現れる。」

(傍線筆者)と述べる。ここには「金閣寺」＝溝口の手記という考えに対する出原の疑問(というよりもその見方に対する批判)が表れている。『金閣寺』は言うまでもなく作家、三島由紀夫の手による作品である。本稿では溝口の手記について論じてきたが、それは『金閣寺』と同一ではない。本稿が提示した書き終えた溝口という主体と手記を差し出す所作は、溝口の手記と『金閣寺』との間の空所に言及する可能性である。

※ なお本文、並びに三島の文章の引用は断りが無い限り、全て『決定版三島由紀夫全集』(新潮社平成十二年十一月―平成十八年四月)に拠る。特に必要と思われる場合を除き、ルビ、傍点等は省略している。

【付記】本稿は博士学位請求論文「三島由紀夫小説テクスト研究」(九州大学比文博甲第一九三号)第五章「他者への回路―三島由紀夫『金閣寺』論―」を加筆・修正したものである。

(北九州市立文学館 学芸員)